

# 文明研究に求められるもの

「国立大学から文系消える？」—2014年9月2日の東京新聞にこのような見出しの記事が掲載された。文系の大学教員にすれば驚きを禁じ得ないであろうこの記事は、そもそもは文部科学省の「国立大学法人評価委員会」の提言に端を発する。この問題は翌年2015年にも多くの物議を醸し、NHKも特集番組を放映している。この提言の趣旨は、各大学に「強み・特色・社会的役割を踏まえた速やかな組織的改革」を求め、「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を促す目的であったようであるが、「誤報」あるいは「誤解」など様々な議論を呼ぶことになった。確かに「廃止」というのは過度に歪曲した解釈かもしれないが、文部科学省が大学の文科系教育に大きな改革を迫ったことは事実である。そして、そこには昨今の大学教育の問題点もまた垣間見られると思われる。

ところで、冒頭の「文系学部廃止」という言葉は、現在の大学教育が抱える問題点を表しているとも感じられる。そこには、大学教育における二つの特徴—むしろ問題点—が潜んでいるように思われるのである。一つは、教える側の問題である。学問 (discipline) が一旦形成されると、それは自らを補完するように展開する。discipline のための discipline といった理論武装がなされるのである。そして、その担い手である大学教員たちも、ともすると自分自身が研究する discipline に没頭し、やがてそこに埋没してしまう。他方、学生の側にも問題が生じる—二つ目の問題点である。そうした discipline を講義される学生たちは、それを日常の人間営為とは殆ど無関係であると錯覚して学ぶ。こうした傾向は概して人文科学系分野に多く見られるが、学生たちは将来使わない—使えない—知識を身につけることに躍起になる。そして、結果として身につけた能力はグローバル化が進む国際社会においては決定的な差になって現れてくる。日本人学生の国際社会での脆弱さである。おそらく、文部科学省ばかりではなく、多くの教育関係者が我が国の大学教育—とくに文科系教育—に見たのは、大学教育のそうした姿であったのではないだろうか。

諸々の学問は、旧来からの基本構造としては人文科学、社会科学、自然科学に分類される。確かに第2次世界大戦を経た様々な社会変化のなかでは、生命科学、健康科学、情報科学、環境社会学といった複合分野や新たな学問分野が登場してきた。しかし、歴史的には、人文科学は哲学、宗教、歴史学、文学や芸術といった人間の精神文化に関する学問を総称し、その一方で、社会科学は政治学、法律学、経済学、社会学、国際関係論といった社会現象を対象とする学問を総称する。前者は人間存在の基礎となる価値意識を追求するもので、広義には“真・善・美”を扱う。他方、後者は、人間が共同体を形成する際に、その内部における個々人どうしの関係性あるいは個と共同体の関係性、延いては共同体どうしの関係性を追求すると捉えることができる。したがって、人文科学が人間の内奥に向かうのに対し、社会科学は人間の外的な実世界に向かう。それでも、人間の内部あるいは外部という違いはあるものの、一つの学問が人間営為に端を発することはいうまでもない。すなわち、人文科学にしる、社会科学にしる、それぞれに属する学問の一つひとつが人間営為に関わる問題を対象とし、それを論じるなかで理論化され、体系化されてきた。したがって、学問は、本来は人間営為そのものに依拠して

形成されてきたということが出来る。

現代文明を考える上では、昨今日覚ましい進展を遂げている科学技術を無視することはできない。その発端は旧来の学問分類の一つである自然科学である。自然科学は、人間を取り巻く自然界の現象を研究する学問を総称するが、17世紀のデカルトの機械論とF. ベーコンの経験論を基礎とし、とくにニュートンの力学—法則性と数学的記述—を原動力として進展した。もちろん、自然科学も個々のdisciplineを形成する。したがって、discipline内部の補完や理論武装を繰り返してきたことはいうまでもない。しかし、自然科学は技術と結びつくことで新たな領域を開いてきた。自然科学の根底に流れる物質や現象を根本原理にまで分解するという還元主義は、逆に原理にまで分解することで人間をして自然の活用を可能にする。いわゆる科学技術の展開である。実際、18世紀以降に繰り返されてきた自然科学を基調とするイノベーションは、人間に生活の利便性や豊かさをもたらしてきた。それこそが、かつては“近代”と謳歌された文明の姿である。したがって、“近代の遺産”を受け継ぐ今日の文明においては、まさに人間の物質的営為が問われるのである。

冒頭の問題に戻れば、人文科学や社会科学が人間営為の所産であること、そして、ことさら現代文明にあってはそれらの学問が自然科学から展開した科学技術(technology)と相俟って社会を支えていることを考えれば、現代においてこれらの学問を学ぶ目的の一つが明らかになってくる。我々は、人間営為の総体としての文明の在り方を検討しなければならない。すなわち、現代文明を、第一に人間存在の価値意識、第二に社会形成という集団としての整合性、第三に物質的関係性における合理性、といった視点から捉えることが必要なのである。そして、そうした検討こそが大学教育においても求められているのである。

東海大学を創設した松前重義博士は、教育のあるべき姿として文明を学ぶことの肝要さを説いた。それは、disciplineだけにとらわれることなく、人間存在と人間がつくる社会全体の双方を見据えた価値意識—自らの思想—をもって学問し、人間の個々の幸福を世界平和という大きな目標につなげることを指針とする。この自己存在と社会の関係性を規定しているのがまさに自己が生きている文明であり、それ故に文明を学ぶことが重要となるのである。

東海大学文明研究所もまた創設者の意志の延長線上に設立され、それ故に文明研究を推進し「文明学」の構築を果たすことを使命の一つとして今日に至っている。

実際、2004年に開催されたシンポジウム「文明研究のランドスケープ」では、当時の松本亮三所長による文明研究への問題提起を受け、「文明学」の可能性と方向性が提示されている。一方、今日のグローバル化は文明研究をも多様な研究姿勢・視点の導入へと導いている。それは、個々の学問領域からの研究を結集させた複合領域研究というだけではなく、むしろ、それぞれの学問領域を乗り越えて絡み合わせる研究手法をも意味する。人間営為の集合が文明を形成するとき、その精神的営為、社会的営為、物質的営為の全てを複眼的に捉え、かつ、総合する研究手法が必要であり、その

ように構築される文明研究自体が「文明学」の一端を担うことになるのである。すなわち、「文明学」の底流をなす「人間とは何か」という問いかけに対し、人間と社会はそれを取り囲む自然環境との関わりの中でいかなる集合体を形成してきたのか、あるいは形成し得るのかといった人間存在の根本を問い直すことが求められているのである。

このように考えると、現代文明を問い直す論点の一端が多少は見えてくる。人間疎外や環境破壊が問題視され、地球存続の危機から sustainability が叫ばれる今日にあっては、現代文明に関する検討は少なくとも次の二つの問題を内包しなければならない。一つは、“近代の超克”という問題である。この場合、文明理論の様相は“反近代”、“脱近代”の傾向を呈する。果たして近代以降、人間は地球規模で文明の在り方について検討してきたのか。ここでは、“近代”を再考し、反省し、その上で新たな価値を備えた文明の構築を目指すことが必要となる。そして、もう一つは、より現実的、日常的な問題に関わる。科学技術文明の恩恵に浴する人間は、ともすれば“行き過ぎた”科学技術の支配からどこまで脱却できるかという点である。これは、ある意味で“monoculture”を基調とするグローバル化に対しての多文化理解に関わる問題でもある。そして、これら二つの方向性のいずれもが、単に一つの学問分野だけでは解決し得ないことはいうまでもない。何故ならば、対象となる文明が人間営為の総体だからである。

したがって、文明研究所が目指す文明研究の方向性の一つには、まさに上で述べた問題に対する研究手法の確立、その基礎研究があることになる。ここでは、かつて神川正彦氏が提唱したような Inter-Discipline から Trans-Discipline への展開を視野に入れ、人間営為としての文明の姿を、ときとして根底から、また、ときとして多種多様な文明観に対する比較から検討することが必要になる。「文明学」はそれ自体が種々の学問分野を包摂するものであり、この名称一つで具体的な discipline を構築することは難しい。そのために、人間存在と人間営為について総体的に研究する一つの手法として複眼的視野と個々の discipline の総合の可能性を探ることが必要である。こうした学際研究の動きは、昨今では世界規模で見られる。たとえば、地球規模的な問題を検討するための Anthropocene なる活動が各国で進められているし、日本でも京都大学の学際融合教育研究推進センターがさまざまな活動を展開させ、東京大学でも海洋アライアンスの名称の下での学際研究が進められている。

東海大学文明研究所も、文明学構築に向けた一試論として、新たな人文学としての「超領域人文学」(Trans-Disciplinary Humanities) の構築が求められているのではないだろうか。そして、それは教育と研究の双方において有意義な方向性を提示すると思われるのである。